ショパン Chopin

華麗なる作品

マヨルカ島に残る
ショパンのピアノ

ショパンが演奏したエラールのピアノ

プレイエル
（1843年製 筆者蔵）
©Gakken

「気分のすぐれないときにはエラールのピアノを弾く。エラールは、すでに出来上がった音を出すからだ。しかし身体の調子が良い時にはプレイエルのピアノを弾く。プレイエルは自分自身の音を作り出すことができる」

ショパンのピアノ
プレイエルとエラール

文 久元祐子 ◎ピアニスト
text by Yuko Hisamoto

「ピアノの詩人」ショパンがどんな楽器を弾いていたのかについて、簡単に触れてみたいと思います。

デビュー・リサイタルはグラーフ

ポーランドに生まれたショパンは、若干7歳でポロネーズを作曲するなど幼い頃から神童ぶりを発揮しました。ワルシャワ音楽院で学んだ後、1829年にはウィーンでデビュー・リサイタルを開き、成功をおさめます。このとき演奏した楽器は、コンラート・グラーフ（1782～1851）制作のピアノでした。グラーフは、耳の病を抱えた最晩年のベートーヴェンのために4本弦の特注ピアノを制作するなどウィーンを代表する制作家の一人でした。軽やかなウィーン式（跳ね上げ式）アクションのグラーフのピアノは、繊細なタッチと美しい弱音の音色を持ち、シューマン夫妻にも愛用された楽器です。ショパンの才能を高く評価したシューマンは、「諸君、脱帽したまえ。天才が現れた」という名文句でショパンを世に送り出しました。

パリ・デビューはプレイエル

1831年、旅の途中、ドイツのシュトットガルトでロシア軍のワルシャワ侵攻の報に接します。この頃作曲された《革命》のエチュードには、若きショパンの絶望と憤怒が火のように燃え盛っています。そして愛する祖国ポーランドには戻らず、同年9月パリに到着し、この地で音楽家としての人生を歩み始めたのでした。パリ・デビューは、サル・プレイエルで行われ、《ピアノ協奏曲 ホ短調》などが演奏され、絶賛を博しています。このとき使用した楽器は、カミーユ・プレイエル（1788～1855）制作のピアノで、カミーユは、この後もずっとショパンの音楽活動を支えていくことになります。

プレイエル社は、1807年、オーストリア生まれの制作家イグナーツ・プレイエル（1757～1831）が創業したピアノメーカーです。イグナーツはウィーンでハイドンに師事して作曲も学んだ後パリに移住し、工房を立ち上げました。プレイエル社を本格的に発展させたのは、イグナーツの後を継いだ息子カミーユでした。

プレイエルのピアノは、柔らかな音色が特徴の楽器です。ダンパー（止音装置）のフェルトは綿毛のように柔らかく、そのダンパーがふわっと降りてくるため、音の切れがまろやかで、人の声に近い感じです。まさに「歌う楽器」と言えるでしょう。ベル・カント奏法（美しく歌うようなピアニズム）のショパンにとり、常に傍らでインスピレーションを表現してくれる大切な楽器となりました。

速い同音反復打弦が可能なエラール

当時、パリのサロンで人気を二分していたピアノメーカーは、プレイエル社とエラール社でした。どちらの楽器もイギリス式アクション（突き上げ式）を備えていましたが、エラールは、すでに1821年、速い同音反復打弦を可能にしたダブルエスケープメント機構の特許を取っていました。この機構により、現代のピアノメカニックの基礎がつくられたのです。

一方のプレイエルは、メカニズムよりも音色にこだわり、シングルエスケープメント機構を採用し続けていました。8ミリほどのキーディップ（押し下げたときの深さ）を打鍵したとき、プレイエルは打鍵前のもとの位置まで戻さないと次の音が出せません。しかしエラールは、半分ほど戻れば次の音の打鍵が可能です。当然、エラールのほうが速いテンポや華やかなパッサージュの表現を得意としており、超絶技巧の披露が不可欠だった若き日のリストがプレイエルではなく、エラールを気に入っていたのはよく理解できます。

エラール社の創始者セバスティアン・エラール（1752～1831）は、ストラスブール生まれ。イギリスのピアノ制作技術を学んだ後、弟ジャン・バティストとともにパリでエラール社を創立し、ピアノの発展に大きな貢献を果たしました。

ショパンは「気分のすぐれないときにはエラールのピアノを弾く。エラールは、すでに出来上がった音を出すからだ。しかし身体の調子が良い時にはプレイエルのピアノを弾く。プレイエルは自分自身の音を作り出すことができる」という言葉を残しています。

イギリスの技術の粋を極めた職人エラールのピアノvs芸術家の感性を持ちながら楽器を制作したプレイエルのピアノ。エラールの輝きに満ちた宝石のような音色はパリのサロンで愛され、華やかなサロン文化において花形的存在でした。その一方で、プレイエルの持つ独特の音色はショパンの感性を捉えたように思えます。

プレイエルでショパンの《夜想曲》を弾くと、吐息のような密やかさ、繊細なニュアンス、しっとりとした音色で独特の効果をもたらしてくれます。これは第2響板（弦を覆う2つめの響板）を持っていることとも関係しているかもしれません。また、譜面台の左右は手前に引くことができ、燭台を乗せて演奏することができました。まだ電気の無い時代、蝋燭の炎やオイルランプの光の中でショパンの演奏は楽しまれ、サロンの人々を魅了しました。

ショパンは1836年、リストの愛人マリー・ダグー伯爵夫人のサロンでジョルジュ・サンドと出会い、恋愛関係が始まります。38年、2人が過ごしたマヨルカ島には、プレイエルのピアニーノが運びこまれました。ショパンはバッハの《平均律クラヴィーア曲集～24の前奏曲とフーガ～》を毎日の糧としていたことで知られますが、バッハへの敬愛から生まれた《24の前奏曲 op・28》をはじめ、《バラード op・38》《スケルツォ op・39》などの作品が生まれています。

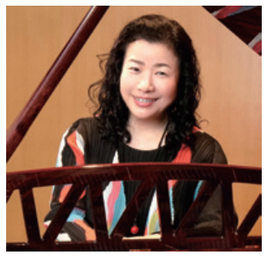
1839年からは、フランス中部にあるノアンのサンド邸で初夏から秋にかけて過ごし、《幻想曲 op・49》《ピアノ・ソナタ第2番》など充実したピアノ作品を残しています。ショパンが所有していた39年製のプレイエル・ピアノが現存しており、ワルシャワ国立博物館に所蔵されています。

プレイエルからインスピレーションを得て作曲された作品のスコアを見ますと、ペダル記号や指使いからは、ショパンのピアニズムの特徴が見て取れます。あえて弱い小指や薬指で1音ずつ丁寧に歌い上げる装飾的パッサージュや黒鍵から白鍵に滑らせるようにして行うレガート奏法など、プレイエルを前提に書かれているように感じます。

1840年ごろのブロードウッドのピアノ

ジョルジュ・サンドとの恋に終わりを告げた翌年、1848年2月22日にパリで二月革命が勃発。ショパンは病をおしてロンドンに向かいます。弟子の1人でスコットランドの富豪の娘、ジェーン・スターリングの招きによるもので、ショパンはプレイエル、エラール、ブロードウッドの3台が置かれた広い部屋に滞在しています。3カ月のロンドン滞在中、ヴィクトリア女王、ワイマール大公妃などに謁見したほか、ピアノ制作家、ヘンリー・ファウラー・ブロードウッド（1811～93）と親しくつきあい、彼のピアノを演奏しています。

しかし、体力の消耗が激しく、ロンドンで最後の演奏会を開きパリに戻ったショパンは、1849年10月17日、姉ルドヴィカ、親友グジマワ、サンドの娘ソランジュらに見守られ、39歳の生涯を閉じました。M



Yuko Hisamoto
東京藝大卒、同大学院修了。ウィーン放送響、ベルリン・カルテット、読響など内外のオーケストラと多数共演。2011年、世界でも数少ないベーゼンドルファー・アーティストに選出される。イタリア国際モーツァルト音楽祭に度々出演。ブロードウッド（1810年頃製）、ベーゼンドルファー（1829年製）などを所蔵し、歴史的楽器の演奏・研究にも取り組む。「優雅なるモーツァルト」などCD16作をリリース。《ショパンとプレイエル・ピアノ》など著書多数。国立音楽大学・大学院教授。
https://www.yuko-hisamoto.jp/